THE FIST OF GOD

神の拳

フレデリック・フォーサイス

篠原 慎＝訳

上

こぶし

神の拳 上

THE FIST OF GOD

フレデリック・フォーサイス

篠原 慎一 訳

角川書店

神の拳（こぶし）（上）

フレデリック・フォーサイス　　訳者　篠原　慎

1994年6月1日　初版発行
1994年7月30日　4版発行

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

〒102　振替東京3-195208

電話／営業部(03)3817-8521／編集部(03)3817-8451

印刷／旭印刷　製本／鈴木製本所

装丁者／渋川育由

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービスにお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
©Printed in Japan

ISBN4-04-791219-0 C0397

神の拳（こぶし）（上）

THE FIST OF GOD

Frederick Forsyth

Copyright © FFS Partnership 1994

Published in Japan by Kadokawa Shoten Publishing Inc.
Japanese translation rights arranged with
BANTAM BOOKS,
a division of the Bantam Doubleday Dell Publishing Group, Inc.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

湾岸戦争の真実を知り、
それについて語ってくれた人たちに
心からの謝意を表したい。
彼らが何者かは知る人ぞ知る――
言わぬが華である。

戦没したＳＡＳ隊員の
未亡人と遺児たちへ
そして本書の完成に多大の
貢献あったサンディーへ

神の拳（こぶし）（上）

イツハク・シャミル……首相
ギデオン・“ギディ”・バルジライ……モサドの工作管理官
モシェ・ハダリ……アラブ学者、テルアヴィヴ大学教授
アヴィ・ヘルツォーク、アリアス・カリム・アジズ……モサドのエージェント駐ウィーン

オーストリア
ウォルフガング・ゲミュートリヒ……ウィンクラー銀行副頭取
エーディト・ハルデンベルク……ゲミュートリヒの秘書

クウェート
アーメド・アル・ハリファ……貿易商
アブ・フーアド中佐……レジスタンスのリーダー
アスラル・カバンディ……女レジスタンス

イラク
サダム・フセイン……大統領
イザート・イブラヒム……第一副首相
フセイン・カミル……MIMI（軍需省）大臣、フセインの女婿
ターハ・ラマダン……首相
サドゥーン・ハマディ……副首相
タリク・アジズ……外相
アリ・ハッサン・マジード……クウェート傀儡政権総督
サーディ・トゥマー・アッバース……共和国防衛軍司令官
アリ・ムスリ……工兵隊司令官
アブドゥッラー・カディリ……機甲部隊司令官
アミル・サーディ博士……MIMI副大臣
ハッサン・ラマニ准将……情報機関ムハバラト防諜部長
イスマイル・ウバイディ博士……情報機関ムハバラト対外情報部長
オマル・ハティブ准将……秘密警察AMAM長官
オスマン・バドリ大佐……工兵隊将校
アブデルカリム・バドリ大佐（オスマンの兄）……イラク空軍飛行隊長
サバーウィ大佐……秘密警察クウェート駐在のチーフ
ジャーファル・アル・ジャーファル博士……核物理学者、原爆開発責任者
サラ・シッディキ博士……原爆開発技術者

主な登場人物

英国

マーガレット・サッチャー……首相
ジョン・メージャー……新首相
ピーター・ド・ラ・ビリア卿……陸軍中将
コリン・マッコル卿……SIS長官
ポール・スプルース卿……内閣官房副長官、メドゥーサ委員会委員長
J.P.ロヴァト准将……特殊部隊総監
ブルース・クレイグ大佐……SAS大隊長
マイク・マーチン……SAS少佐
テリー・マーチン博士……中東学者、マイクの弟
スパーキー・ロウ……SAS将校、駐カフジ
スティーヴ・レイング……SIS中東担当工作統制官
サイモン・パックスマン……SISイラク・デスク長
ジュリアン・グレイ……SISリヤド支局長
ブライアント博士……細菌学者、メドゥーサ委員
ラインハート博士……毒ガス専門家、メドゥーサ委員
スチュアート・ハリス……ビジネスマン
ジョン・ヒップウェル博士……物理学者、メドゥーサ委員
ショーン・プラマー……GCHQアラビック・サーヴィス責任者

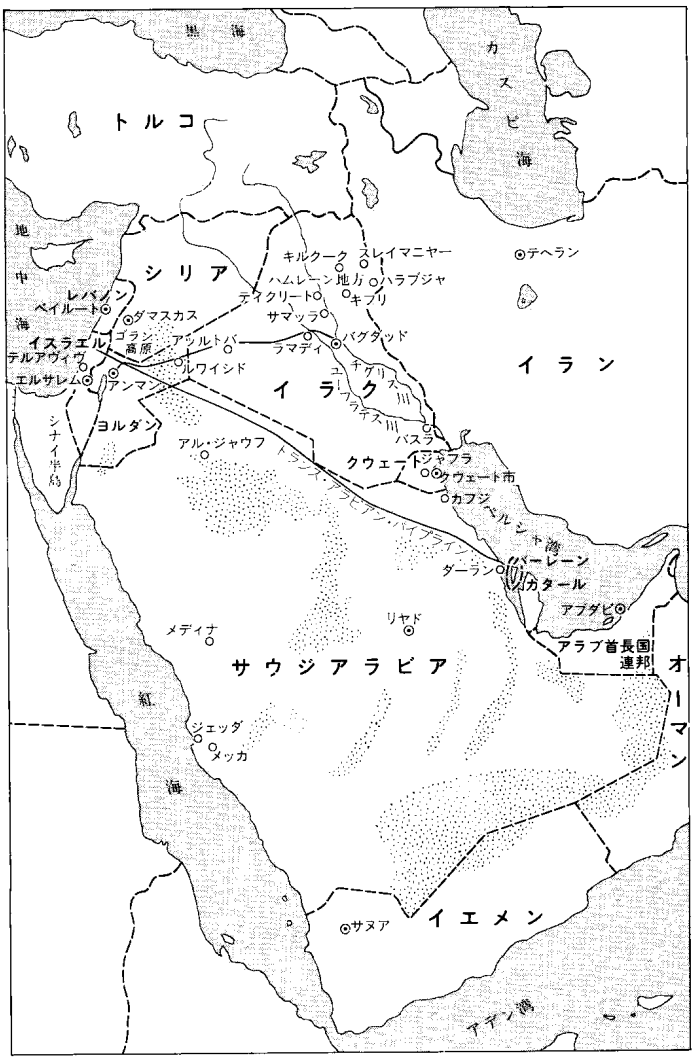
アメリカ合衆国

ジョージ・ブッシュ……大統領
ジェームズ・ベイカー……国務長官
コリン・パウエル……統合参謀本部議長
ノーマン・シュワルツコフ将軍……多国籍軍総司令官（米中央軍司令官）
チャールズ・ホーナー中将……多国籍軍航空部隊司令官（米中央軍航空部隊司令官）
バスター・グロッソン准将……多国籍軍航空部隊副司令官（米中央軍航空部隊副司令官）
ビル・スチュアート……CIA副長官（工作担当）
チップ・バーバー……CIA中東担当官
ウィリアム・ウェブスター……CIA長官
ドン・ウォーカー……（第9航空軍）第4戦術戦闘航空団第336飛行隊搭乗員
ハリー・シンクレア……CIAロンドン支局長
“ダディ”・ローマックス……引退した核物理学者

イスラエル

ヤーコブ・ドロール将軍……モサドの長官
サミ・ゲルション……モサドの非合法工作部長
ダヴィド・シャロン……モサドのイラク・デスク長
ベンヤミン・ネタンヤフ……外務次官

イラク・クウェート周辺地図



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

十分後に死ぬはずの男が声をあげて笑っていた。

男の笑いをさそったのは、モニク・ジャミネという女性秘書からたったいま聞かされた話だった。このとき、一九九〇年三月二十二日、氷雨ふる寒い夜、男はモニクの運転する車で自宅へ帰る途中だった。

その話というのは、二人の勤務先、スターユ街にあるスペースリサーチ社の同僚にまつわる滑稽譚で、その同僚は根っからの妖婦、男殺しとみなされていたのだが、なんとそれがゲイだとわかってしまったというのである。このまやかしが男の下卑たユーモアのセンスを刺激して、いたく喜んでしまったというわけである。

モニクと男がルノー21エステートに乗って、ブリュッセル郊外、ユクルの町にあるオフィスを離れたのは午後七時十分前だった。彼女が自分の車でボスを送り迎えするようになったのは数か月前のことで、それまでボスはフォルクスワーゲンを自分でころがしていたのだが、その運転技術があまりにもお粗末なため、このまま放っておくと必ず死んでしまうと思ってワーゲンを無断で売り飛ばしてしまったのだ。

オフィスから彼のアパートまで十分もあれば着いてしまう。そこはフランソワ・フォリー街のはずれにある三棟からなる集合住宅シェリドルーの真中の棟なのだが、二人は途中でパン屋に立ち寄った。男が好んで食すパン・ド・シャンパーニュを買うためである。吹き降りの雨のなかを二人は顎を胸に埋めるようにして店に走りこみ、尾行車の存在に気づかなかった。

無理もない。二人ともそういうことにはまったく無縁なのだ。じつは顎が濃い髭でおおわれた二人の男が無印の車で数週間前からこの科学者を尾行し、つかず離れず監視をつづけていたのだが、彼のほうではまったく二人の動きに気がつかなかった。

墓地に面したパン屋の店から出た科学者はパンの塊をバックシートに投げ入れると、自分も助手席に乗りこんで帰路を急がせた。そして七時十分、モニクは通りから一五メートルほどひっこんだところにあるアパートの、ガラスをはめた両開きのドアの前にルノーを停めた。彼女は部屋まで送っていくと申し出たが、科学者は断わった。理由はわかっていた。ガールフレンドのエレーヌが来ることになっているので、モニクがいては都合が悪いのだ。エレーヌはあくまでも友人であり、自分がカナダに妻を残してブリュッセルで働いているとき独り暮らしの無聊を慰めてくれているだけだというのが彼の建前であり、ボスを賛美してやまない秘書のモニクは、そうした彼の虚飾をすなおに受け容れていた。

彼はいつものようにベルト付きのトレンチコートの衿を立てて車から降りると、いつも手放したことのない大きな黒いキャンバス地の鞄を肩にかけた。その中には科学論文、各種プロジェクトの書類、計算書、データ等がぎっしり詰まっていて、重さが一五キロに余る。この科学者は金庫の類をいっさい信用せず、最新のプロジェクトの詳細を記した文書等は肩にかけているほうがずっと安全だと理屈にあわない信念を抱いているのだ。

彼は一方の肩に鞄をかけ、もう一方の脇の下にパンをはさみ、ガラスのドアの前に立ってキーをまさぐっている――それがモニクが最後に見たボスの姿だった。彼女はボスがドアを抜けて中に入り、自動ロックのドアが閉まるのを見届けてから、車でそこを離れた。

科学者の住まいは、その八階建ての棟の六階にあった。エレベーターは建物のいちばん奥に二基あり、そのシャフトを取り巻くようにして階段が上へのび、各階の踊り場に非常ドアが設けてある。彼はエレベーターで六階へ上がった。ホールへ一歩踏みこむと足許を仄かに照らすライトが自動的についた。彼はパンを脇にはさみ、鞄の重さに身体を傾け、依然としてキーの束をガチャガチャいわせながら左へ曲り、さらにもう一度左折して朽葉色のじゅうたんを敷いた廊下を自室まで進み、カギ穴にキーを差しこもうとした。

薄暗いホールに突き出しているエレベーターシャフトの右側で待ち伏せていた殺し屋が、消音器をつけた七・六ミリのベレッタ・オートマチックを構えて音もなく姿をあらわした。拳銃には、はじき出された空薬莢がじゅうたんの上に散らばるのを防ぐために、ビニール袋がかぶせてあった。

一メートル足らずの至近距離から五発の銃弾が科学者の後頭部と頸部に撃ちこまれた。人ひとりを殺すには十分すぎる数であり、打撃であった。科学者の大柄でがっしりした身体が前向きのままドアに寄りかかり、ずるずると床のじゅうたんに崩れ落ちた。殺し屋は犠牲者の死を確認しようとさえしなかった。その必要もなかった。囚人を相手に実地訓練をかさねてあり、自分の殺人が成功したかどうか直感的にわかるのだ。彼は足取りも軽く六階から階段を駆け下りると、裏口から建物を抜け出し、樹木の点在する庭をよこぎって、待っていた車に飛びこんだ。そして一時間もしないうちに自国の大使館に入り、一日とたたないうちにベルギーから出国した。

エレーヌがアパートへ着いたのは五分後だった。初めは恋人が心臓の発作にみまわれたのだと思い、パニックに襲われた彼女は電話で救急車を呼んだ。そのあと恋人のかかりつけの医者が同じ棟に住んでいるのを思い出して、その先生をも呼んだ。救急車が先に着いた。

救急隊員の一人が俯せに倒れている被害者の重い身体を動かそうとしたが、その手が、たちまち、血まみれになってしまった。数分後、隊員と医者は被害者の死亡を確認して、その旨、宣言した。六階にはフラットが四つあるが、入居しているのは犠牲者のほかに老齢の婦人だけで、その老女がドアのところへ出てきて、クラシック音楽を聴いていたし、分厚い頑丈なドアに守られているので、外の音は何も聞こえなかったと証言した。ことほどさように、このシェリドルー・アパートは、ひっそりと住み暮らすにふさわしいところなのだ。

床に倒れ伏している犠牲者の正体は、火砲の設計家として有名な奇矯の天才、ジェラルド・ヴィンセント・ブル博士で、最近はもっぱらイラクの独裁者サダム・フセインのために仕事をしていた。

ブル博士殺害事件のあと、ヨーロッパ各地で奇怪な現象が頻発しはじめた。ベルギーの防諜機関が認めたところによると、同博士は過去数か月にわたってほとんど毎日、顎が黒々と髭におおわれた、肌の浅黒い地中海人種の二人組が乗った無印の車に尾行されていたという。

四月十一日には、イギリスの税関がミドルズブラ（イングランド北東部クリーヴランド州の州都）の港で、巨大な鋼鉄製のチューブを八本、押収した。いずれも精密に鍛造、加工したもので、両端の巨きなフランジを強力なナットとボルトで接続して一本の長大なパイプが作れるようになっていた。税関当局は、これらの鋼管は船荷証券や輸出許可書に記載されているような石油化学プラント用の資材ではなくて、ジェラルド・ブルが設計した巨大砲の砲身の一部であり、最終目的地はイラクだったと誇ら

しげに発表した。こうして「スーパーガン」にまつわる皮肉な笑劇（ファルス）が誕生し、劇の進行につれて、二重取引や数か国の情報機関による隠微な争い、官僚機構の愚行や政治のごまかしが露呈していった。

数週間のうちにスーパーガンの部品がヨーロッパ全域で相次いで発見された。四月二十三日、トルコ政府は、スーパーガンの一部と思われる長さ一〇メートルの鋼管をイラクへ運ぶ途中のハンガリーのトラックを阻止したと発表した。同じ日、ギリシャの官憲が鋼鉄製の部品を積んだもう一台のトラックを発見し、不運な運転手を共犯者として拘置した。

五月に入ると、イタリア政府はソチエタ・デッラ・フチーネ（鍛造公社製）の計七五トンにものぼる部品を摘発し、さらにローマ近郊の同公社工場で一五トン分の部品を押収した。後者はチタン合金製で、スーパーガンの砲尾の部品となるはずのものだった。このほかにもイタリア北部の都市ブレシアの市内にある倉庫でさらに多くの各種部品が発見された。

ドイツでもフランクフルトとブレマーハーヴェンでマンネスマン社の製作になる、いまや世界的に有名になったスーパーガンの部品と目（もく）される製品が摘発された。

ジェラルド・ブルは自分の頭脳が生み出したこの鬼子（おにご）を現実のものとするために、じつに巧妙なやり方で部品を発注した。砲身を構成する鋼管を製作したのは、じつは、イギリスの二社、バーミンガムのウォルター・ソマーズ社とシェフィールドのフォージマスターズ社であった。しかし、一九九〇年四月に摘発された八点の部品は合計五二点のそれの最後の搬入分だった。これら五二点の部品を組み立てると、長さ一五〇メートル、口径がなんと一メートルという砲身が二本でき、円筒形の電話ボックスほどの砲弾を発射しうるという。

ちなみに、砲身（トラニオン）はギリシャから、駐退復座機構を構成するパイプ、ポンプおよびバルブはス

イスとイタリアから、閉鎖機本体はオーストリアとドイツ、装薬はベルギーからそれぞれ送られた。都合八か国の会社がスーパーガンの製造に関与したことになるが、いずれも自社で製作したものの正体をまったく知らなかった。

マスコミはお祭り騒ぎで、点数を稼いで有頂天の税関職員や何も知らずに関与した関係各社を張り切って訴追するイギリスの司法当局も、それに劣らず浮かれていた。だが、だれも知らなかったが、馬はすでに駆け出していたのだ。押収された部品は、じつは、スーパーガン第二号、三号、そして四号向けのものだったのである。

ジェラルド・ブル殺害事件に関していえば、メディアの世界で怪しげな憶測が横行した。まず最初に唱えられたのはCIA犯人説で、これは不可解な出来事があると何でもCIAの責任にしてしまうというCIA症候群の一典型である。むろん、荒唐無稽の妄想にすぎない。たしかにラングレーが過去、特定の状況下で、特定の人物の抹殺を黙認した例はなきにしもあらずだが、ほとんどの場合、対象となったのは、手ひどい裏切り行為にはしった工作員とか手先の無頼漢や二重スパイである。CIA本部のロビーには最上階に君臨する殺人狂の長官たちが恣意的に発する命令によって、同僚の手で射殺されたエージェントたちの亡霊が満ちあふれているといった説は、たしかに面白くはあるが他愛のない妄想にすぎない。

それに、ジェラルド・ブルは諜報世界の人間ではない。著名な科学者であり、火砲――通常兵器に属するものや極めて特殊なものも含めて――の設計家兼製作者であり、なおかつ長年にわたってアメリカのために働き、米軍内の友人たちに自分の夢の目標についてさんざん説き聞かせてきたアメリカ市民なのである。アメリカの敵と（その時点で）みなされていない国のために働く兵器産業の設計家や経営者がすべて抹殺の対象になるとしたら、南北米大陸やヨーロッパで合計

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com